



# 邂逅 -book and place-

sakaushi lab:no5108026:sho kanazawa

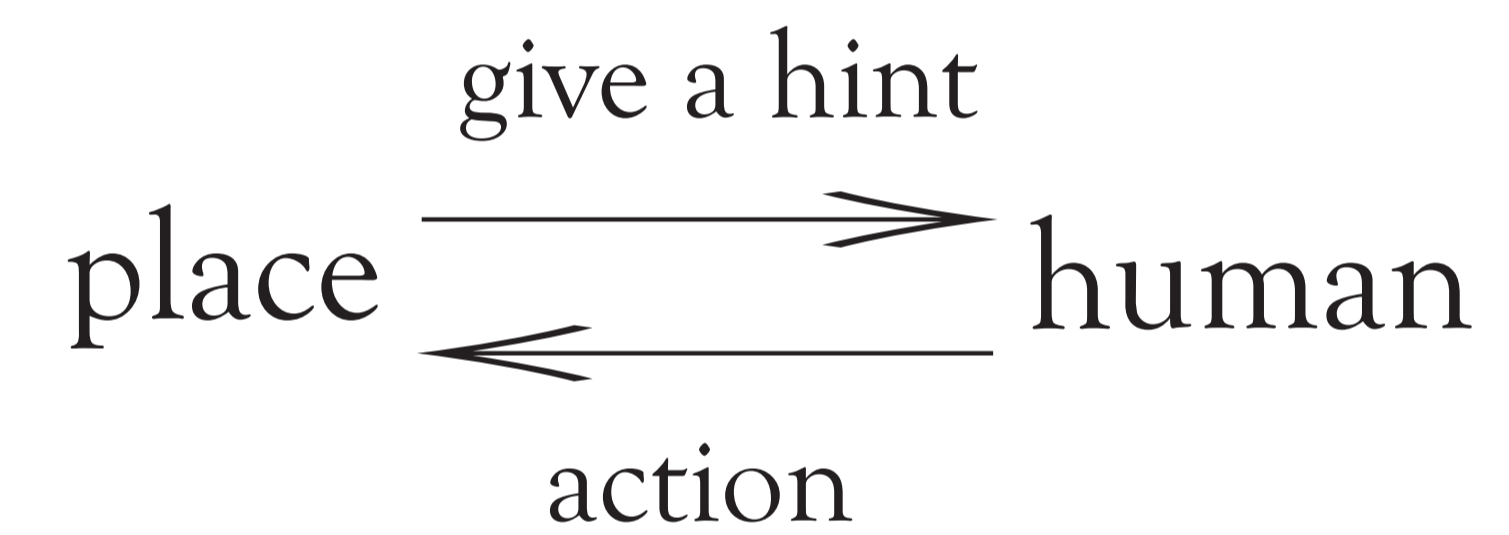
## • Concept



「何となくその場で、何となく行為する」ことはできないだろうか。

誰もいない砂浜にパラソルを立てるとき、私たちは何となくその場に座る。それはその場が行為を強制するわけでもなく示唆するかのようものを、私たちがその場にいることで感じ取るからだと思う。

私はこの、その場を感じ取る「身体性」を用いた建築を考えようと思う。



「身体性」



その場の行為の手がかりを見つけ行為すること

それは行為と場のはじまりであり、今では無くなりつつあることである。



カラッポな建築では行為の手がかりが無すぎる。  
かと言って、カタマリな建築では行為が強制される。



だから、カラッポでもカタマリでもなく、  
身体が感じ取る程度の手がかりのある場を考える。



In place, We`re given a hint and it into action.



In Architecture has body and meeting

• Kind of library



in Architecture → in Web

現在の図書館、未来の図書館について考えてみる。  
まず、図書館とは「**知の集積**」の場である。

現在、知の媒体が本からデータ化されてきている。  
それと共に、Web 図書館ができ、図書館という存在が  
建築という媒体を必要としなくなっている。  
しかし本という媒体の需要はこれからも高いものである。



search

そして、建築の図書館には「**身体性**」という特徴がある。

それは、「**知の集積**」の中から

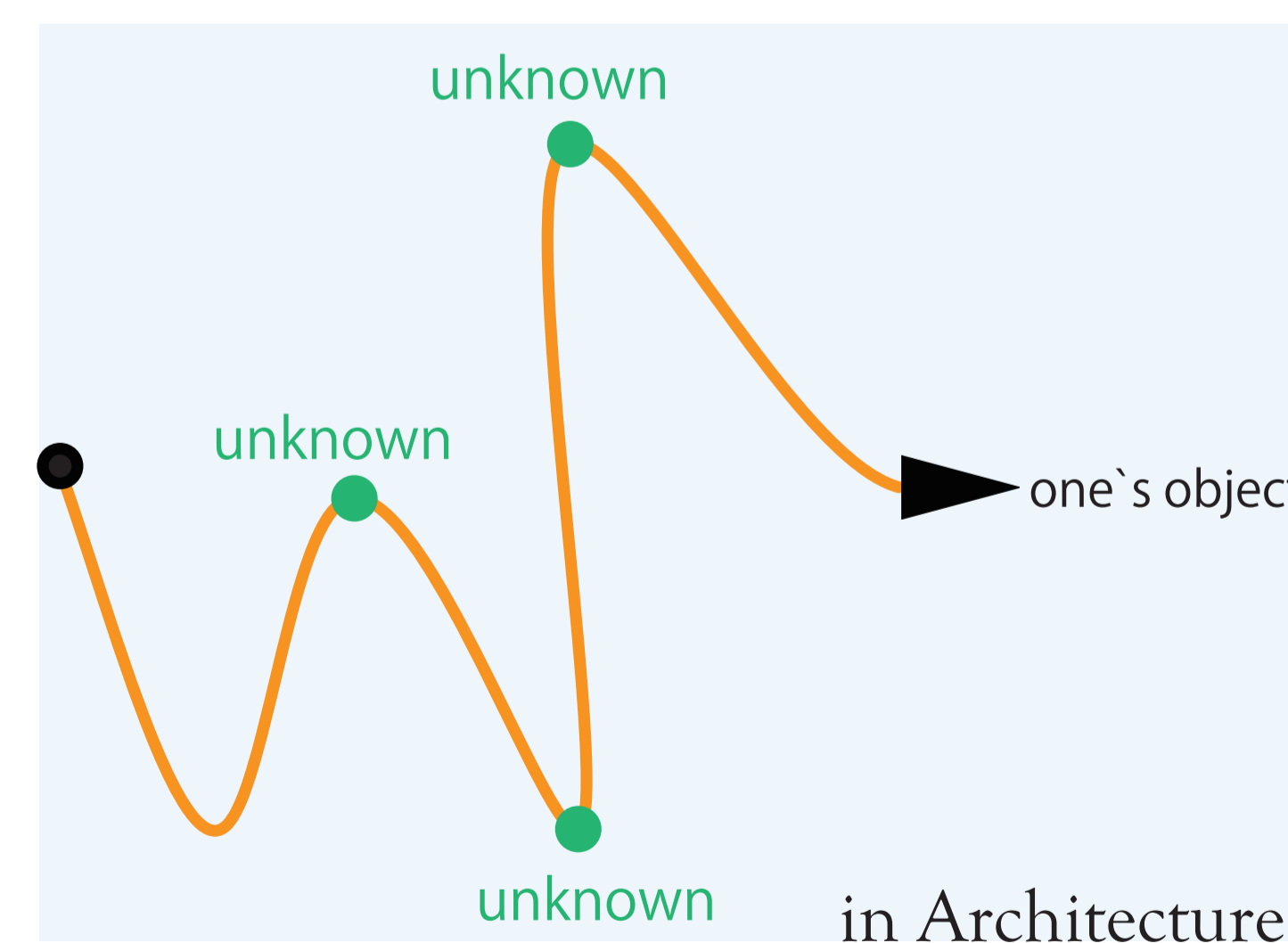
in Web

求める情報を探し出す行為のことだ。

ウェブ空間ではキーワードを打てば目的の情報が只、そのまま出てくる。身体的空間では「**知の集積**」の中から、

探し出す行為によって、建築の図書館という場で「**予期せぬ知との邂逅**」が生まれる。

これはウェブ空間では生まれない、建築という媒体だから生まれることである。



in Web

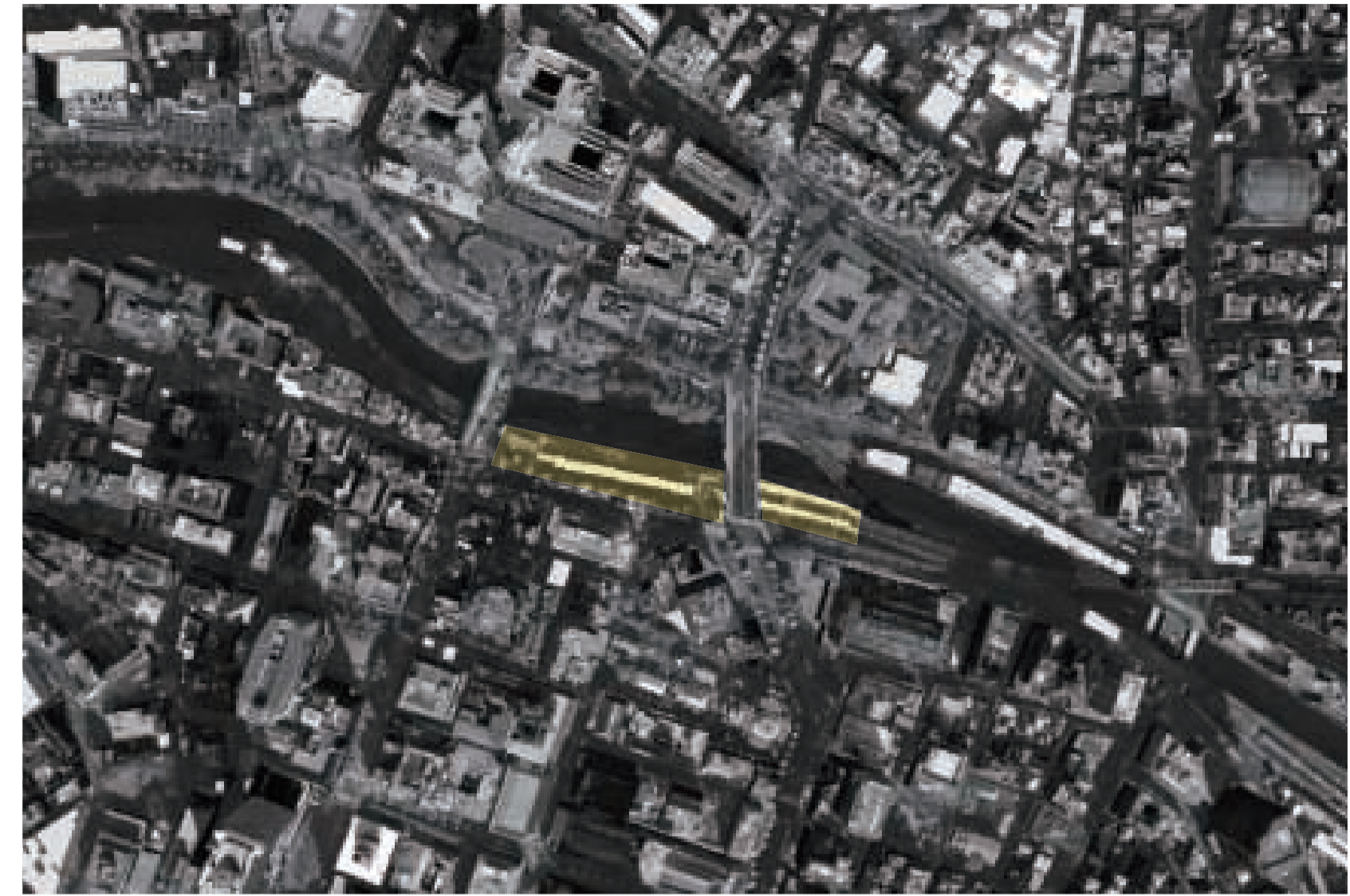
そこで、本設計の図書館は、本を専門とした、「**予期せぬ知との邂逅**」を誘発する空間を考える。

それは、ある意味、迷路的な「**知の集積**」の書架の森で、通りすがりの切り株で休むなどの「**身体性**」・行為の手がかりのある場である。



# Art Library In Ochanomizu

## • Site data



敷地は JR の御茶ノ水駅、及び茗溪通りの駅側である。  
ここはかつて、人口の谷だった。 敷地面積：8550[m<sup>2</sup>] 容積率：500[%] 建蔽率：80[%]

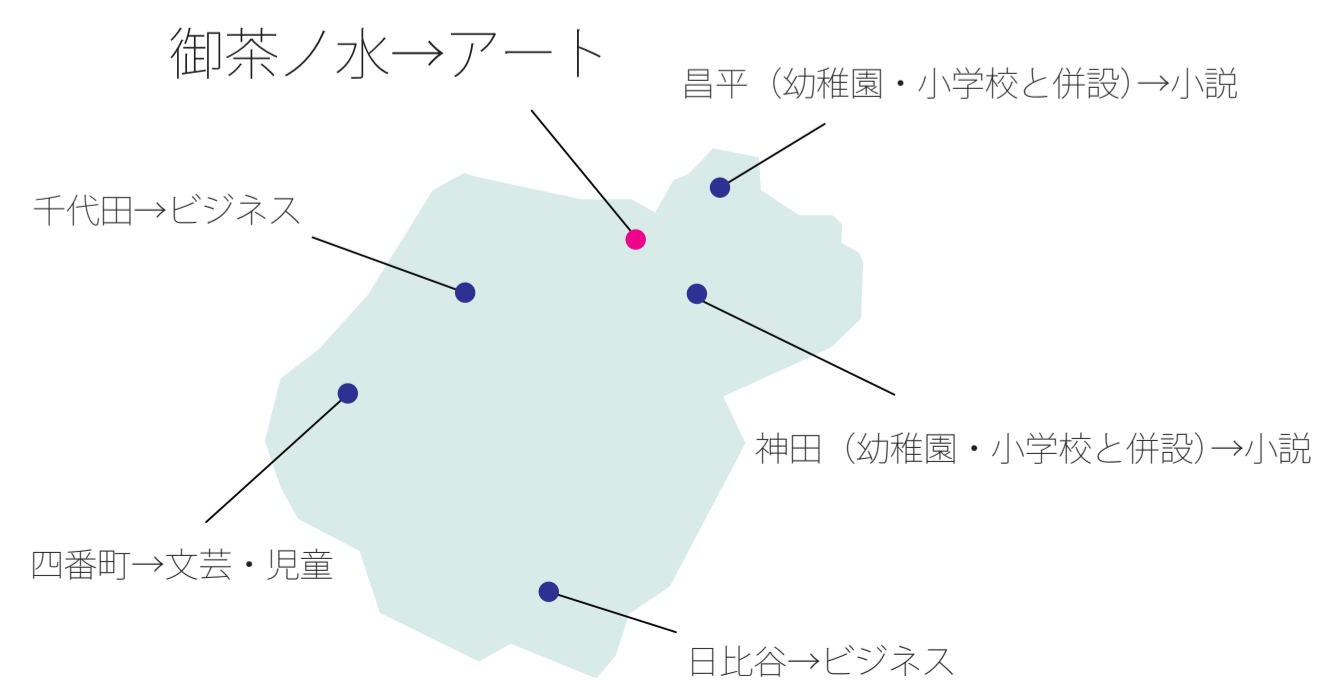


しかし、現在では駅上部のヴォイドと茗溪通りの神田川側の建物群が重なり、建物が擁壁と化し、谷を殺している。そこで、駅上部と、茗溪通り神田川側を低層で一体化させることで谷としての記憶を取り戻す。

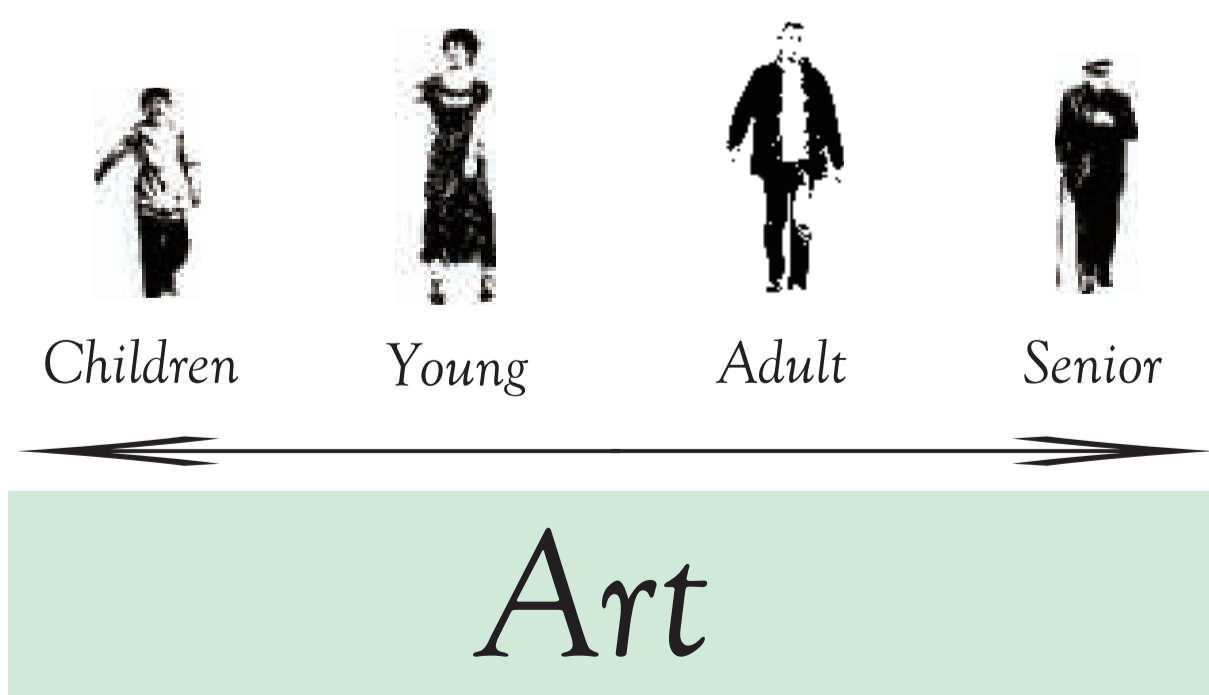


今回は特に、川沿いとしての景色と **2つの橋** に挟まれた敷地であることを考える。

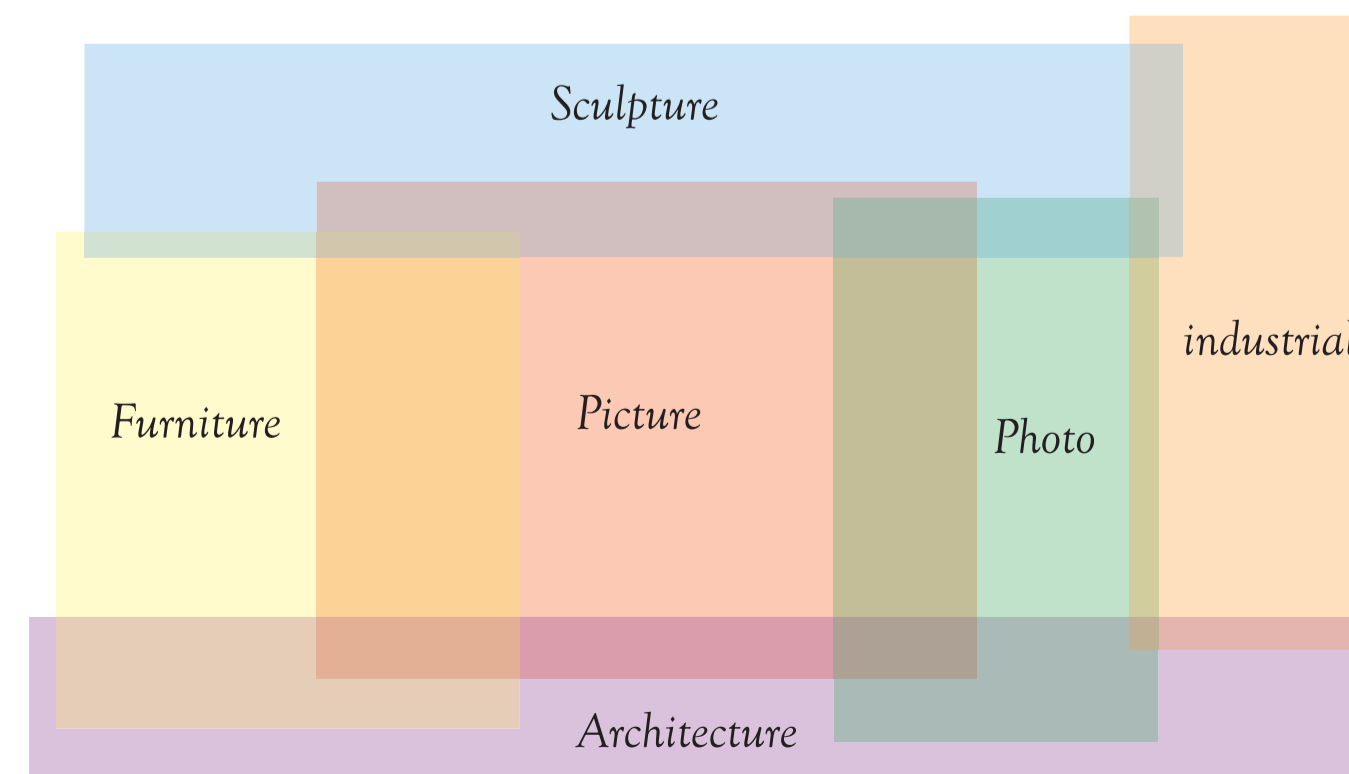
## • Used



千代田区の公立図書館は五つあり、それぞれに特色がついている。それゆえに、年齢層を選ばない図書館が不足している。



現在、千代田区内の図書館にないアートの分野は年齢層が広く、分野内部での関連性が強い。よって、「**予期せぬ知との邂逅**」が好まれる。



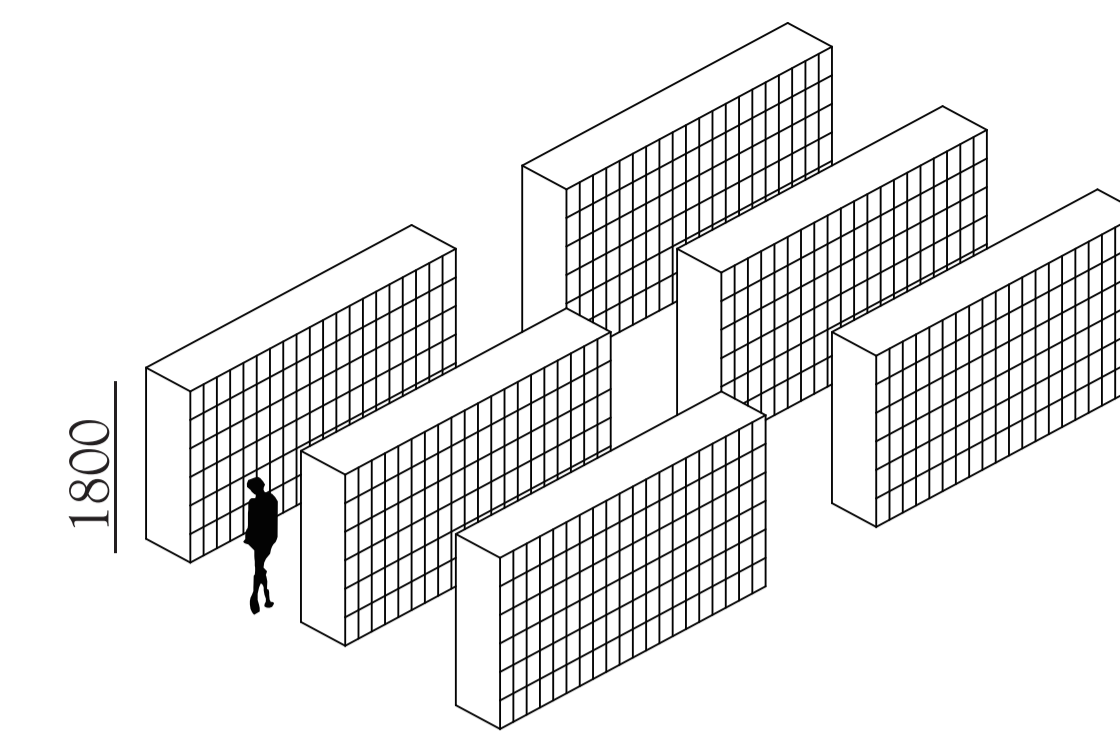
そこで、本設計では御茶ノ水という年齢を問わない土地に、アートの専門図書館を設計する。

御茶ノ水橋と聖橋、2つの異なるデザインの橋を間の建築を用いてつなげる。そうすることで、建築が御茶ノ水に溶け込むともに御茶ノ水の場を強くする。



Making the stacks` s forest

• Design Diagram 1/ 知の集積→書架の木

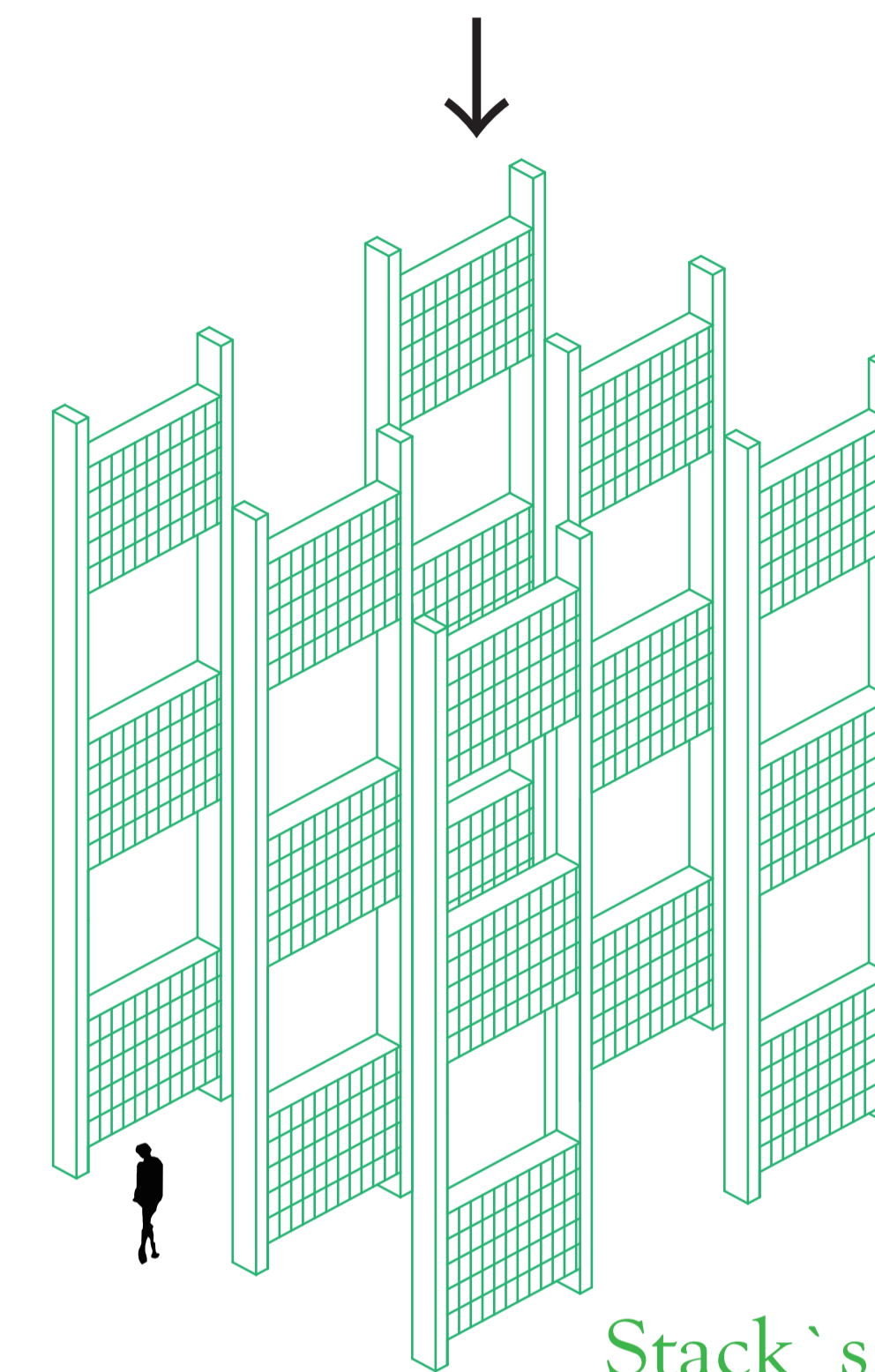


intlect  
accumulation  
human

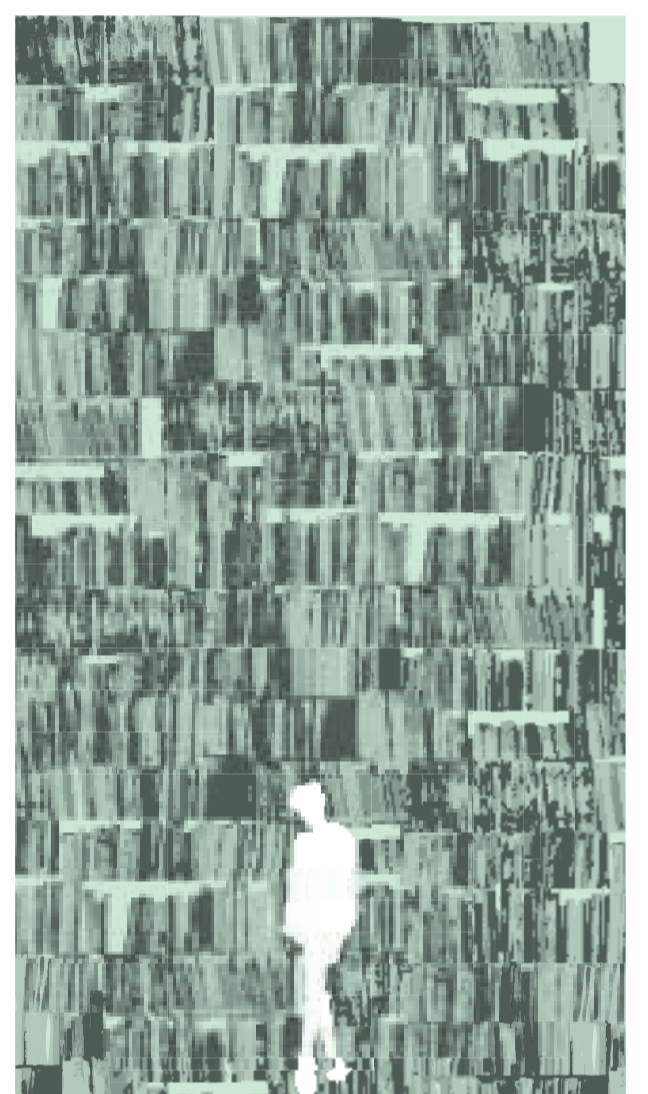
現在の書架高は 1800mm が推奨されている。  
しかし、人間と同程度の高さのものを  
知の集積と呼べはしない。

なぜなら、知の集積は意識として  
人を超えるものだからだ。

それを空間化するのであれば、  
書架には高さが求められる。

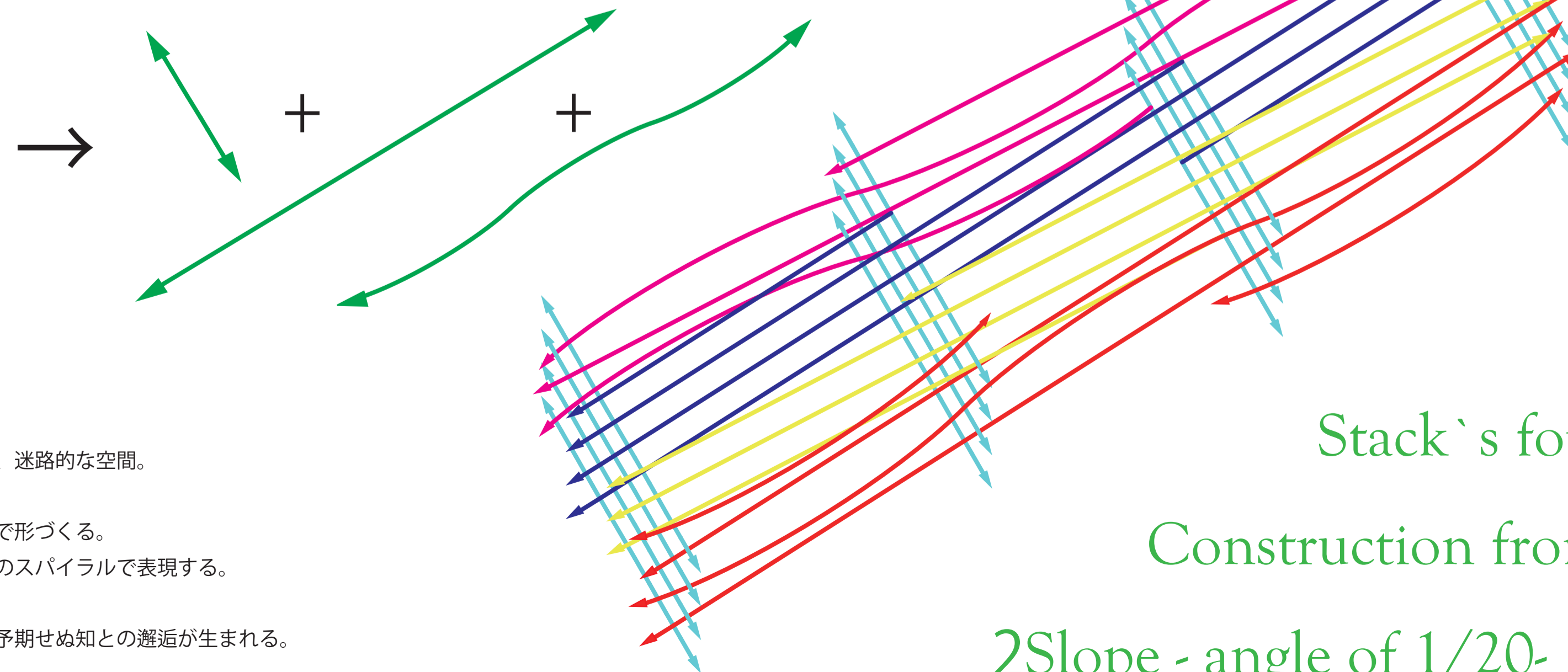
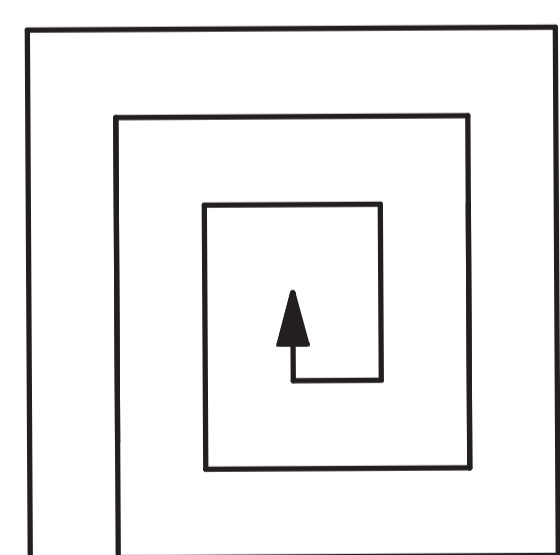


Stack`s trees



そこで、柱と本棚を組み合わせた  
書架の木を、書架の森を形成する。

• Design Diagram 2/ 予期せぬ知との邂逅→書架の森



書架の森を形成する。ある意味、迷路的な空間。

今回はそれを 2種類のスロープで形づくる。  
森の奥へと進む感覚をスロープのスパイラルで表現する。

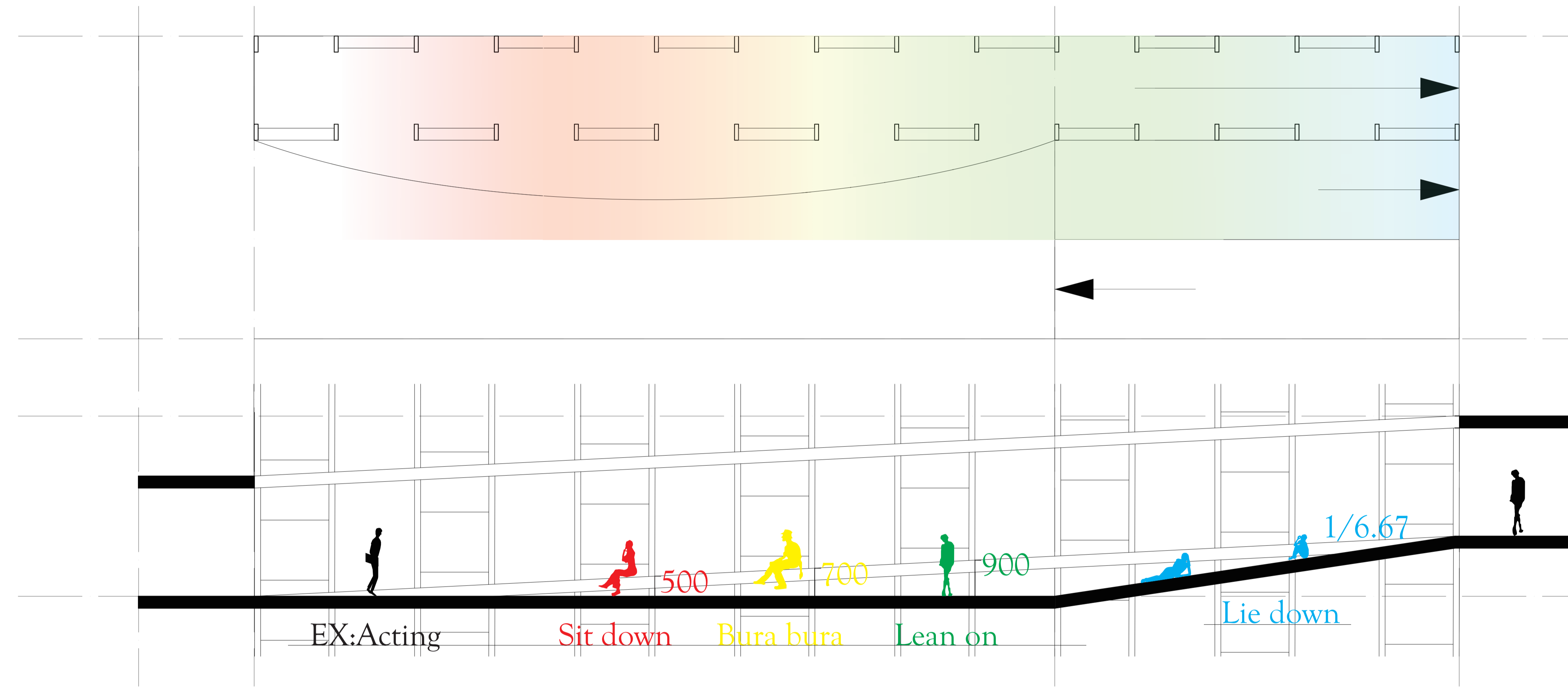
これが、書架の木と絡むことで予期せぬ知との邂逅が生まれる。



Walk around the stack`s forest



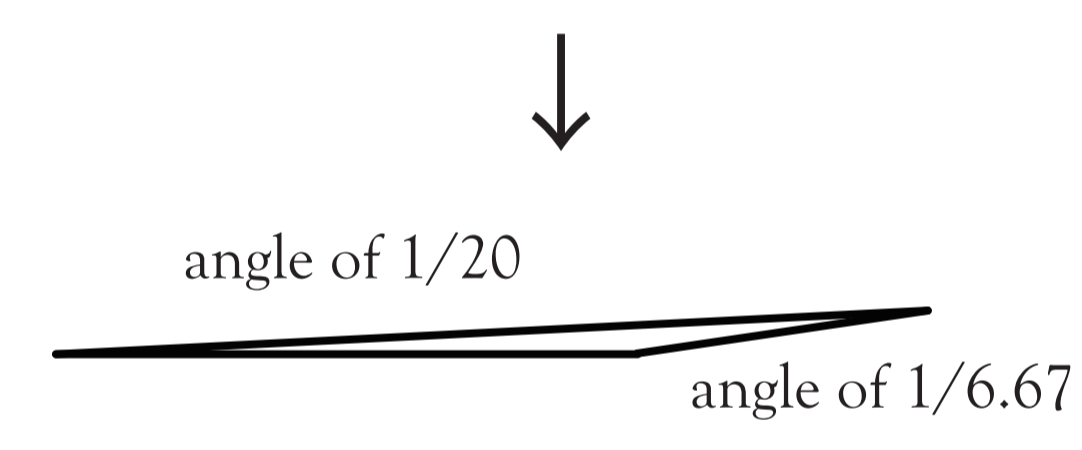
Body be there



floor plan

section

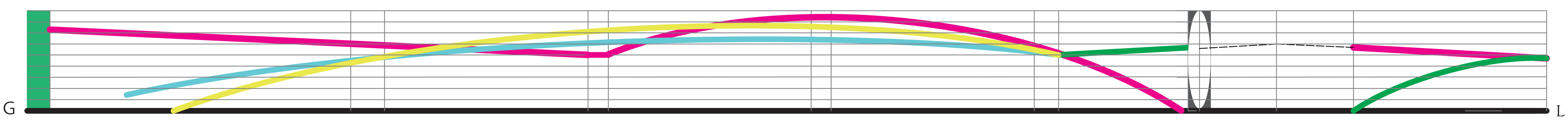
- Design Diagram 3/ 身体性
- 切り株にどう座るか。  
木の下に座るのか、寄りかかるのか。  
地面に対してどう向き合うか。
- それは、その場の感じ取り自分の行為の場所を見つけること。
- そんな身体性にあふれた閲覧スペースを設ける。



Between in two bridges

- Design Diagram 4/ 2つの橋

2つの橋の間としての建築を考える。  
直線の御茶ノ水橋と曲線の聖橋のデザインから  
屋根のデザインを考える。  
波長・位相の異なる屋根が合わさることで、  
2つの橋の間のチューナーとなる。





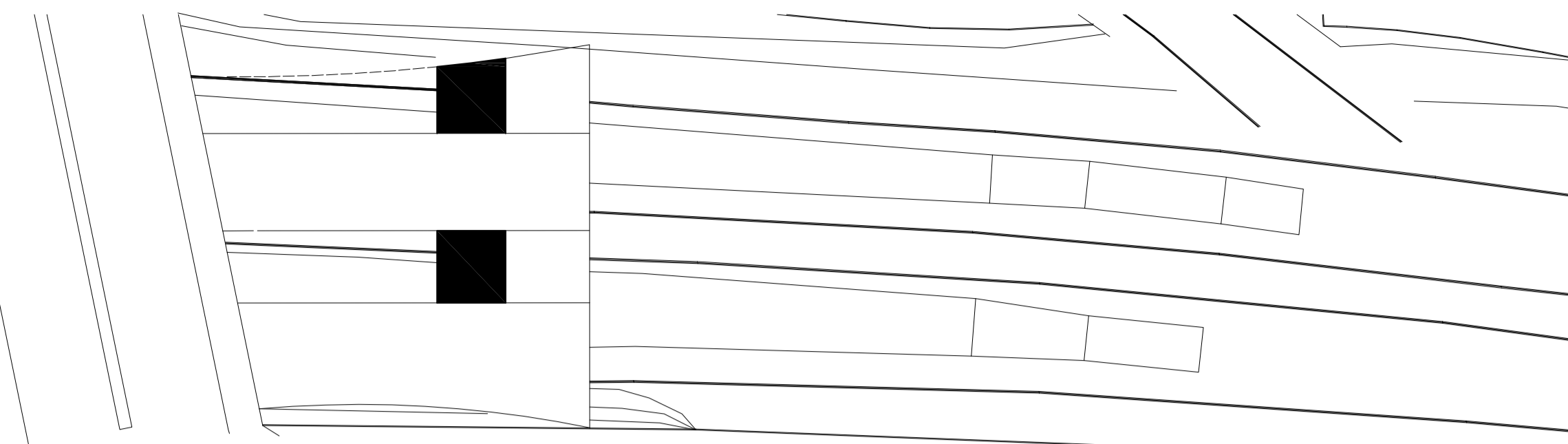
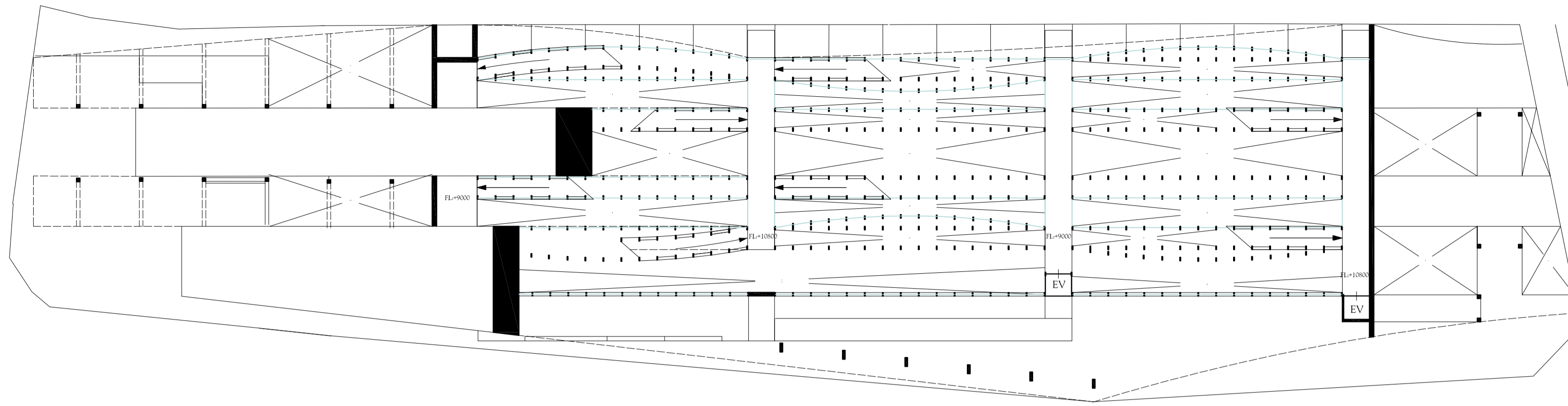
Night view from Ochanomizu bridge



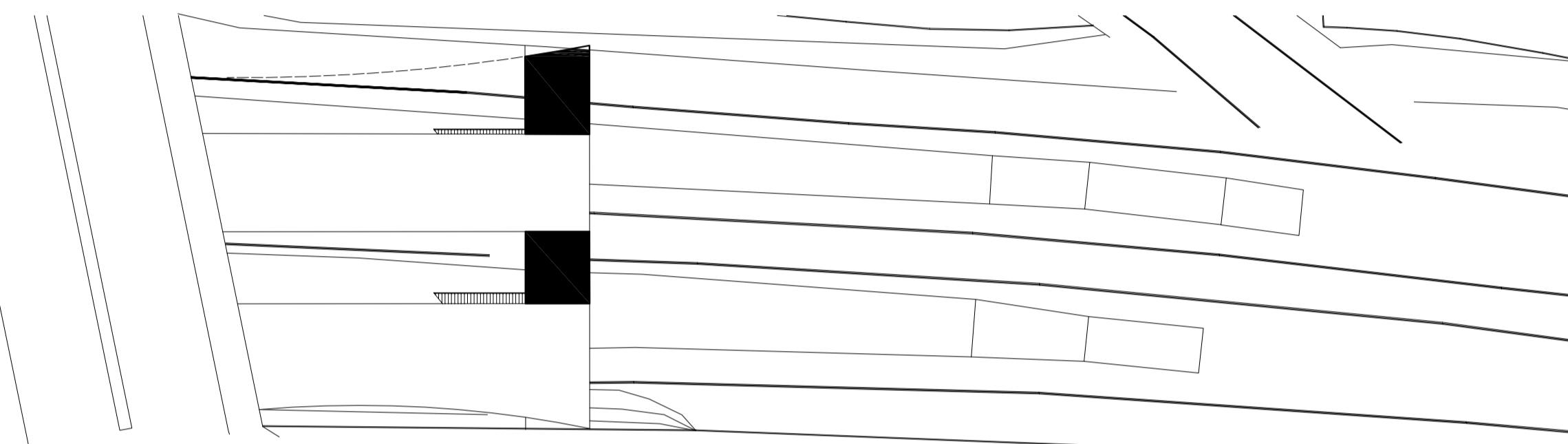
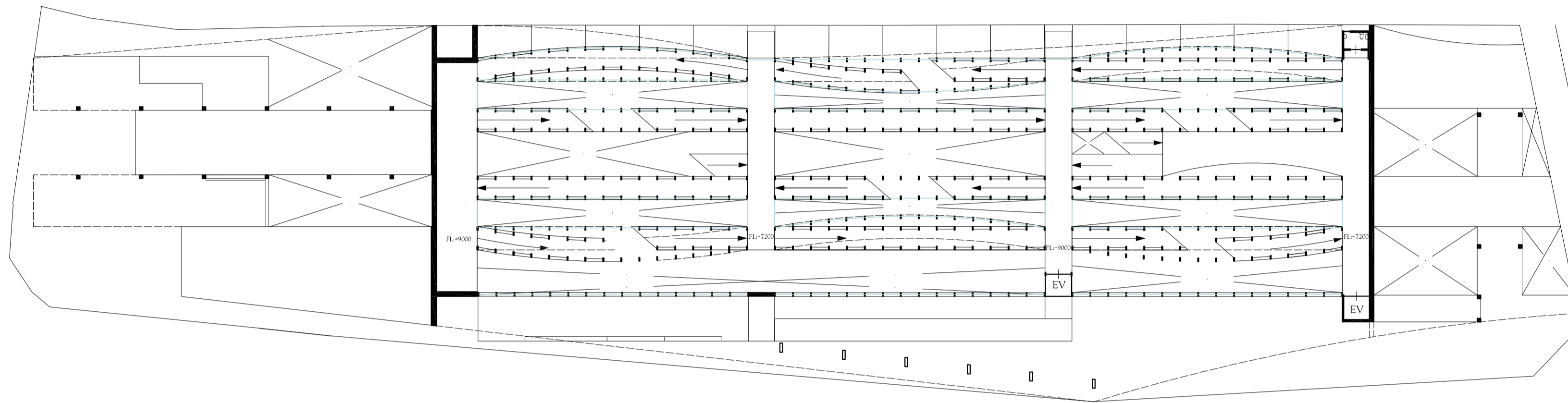
Station's face



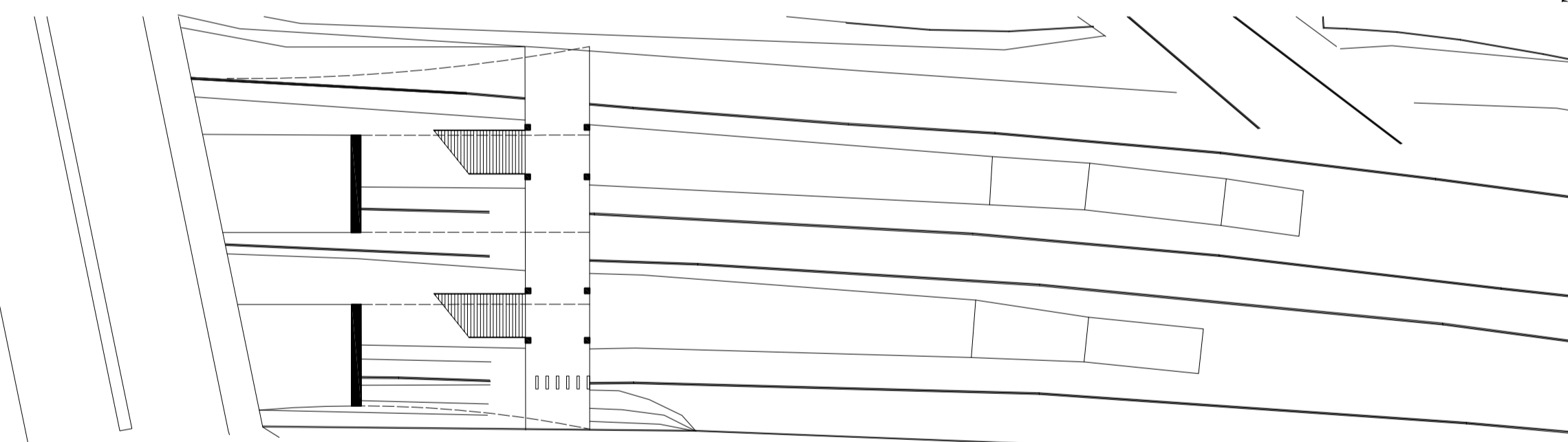
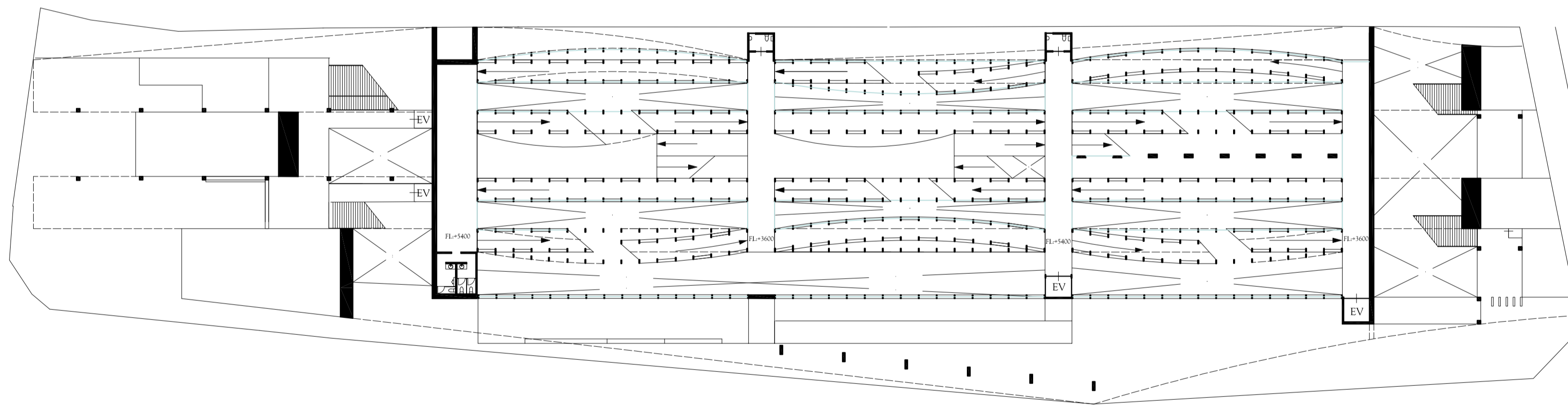
Meikei street view



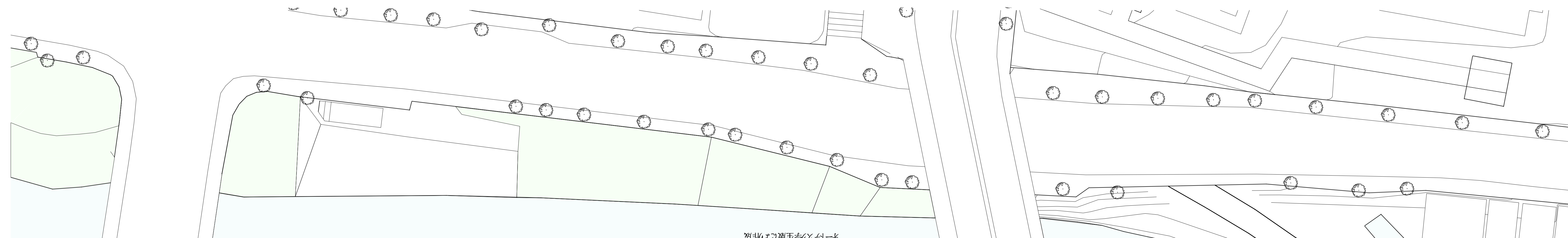
GL+9000=FL+1

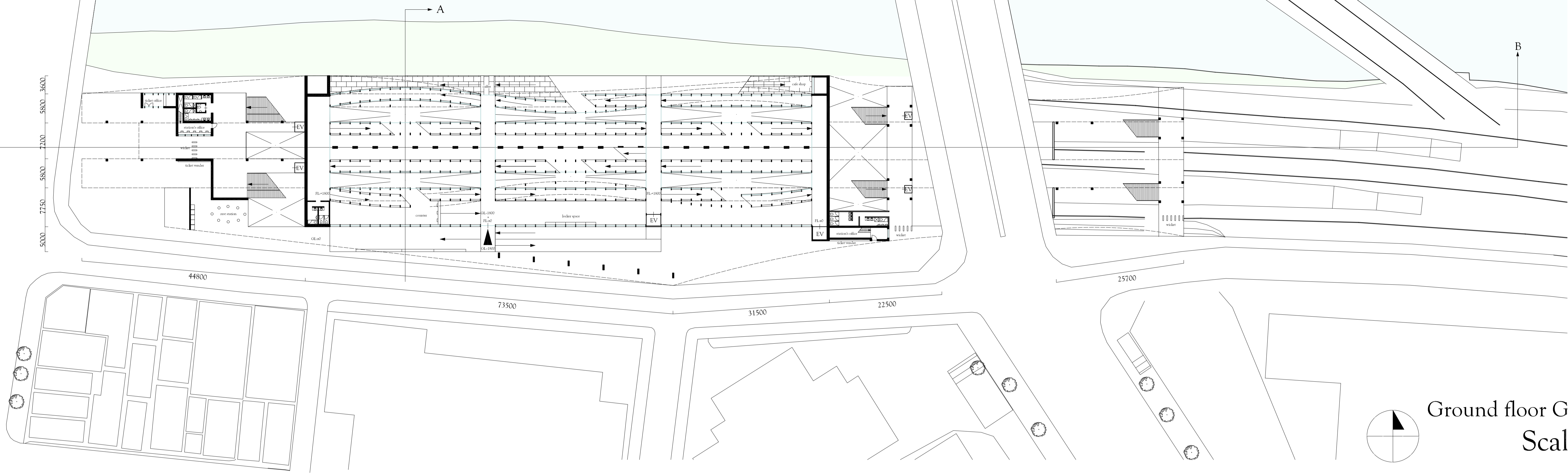


GL+7200=FL+9

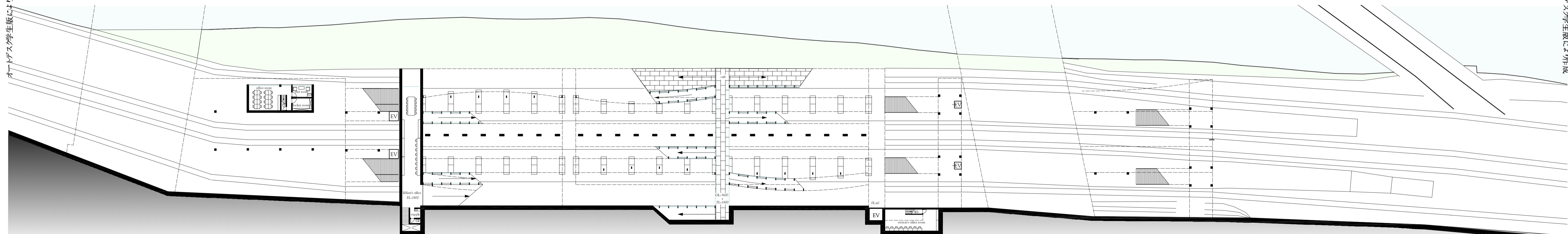


GL+3600=FL+5

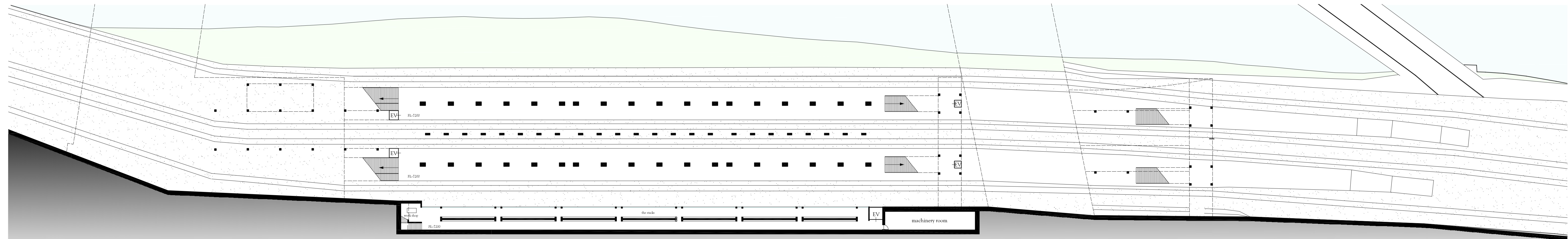




Ground floor G Scal

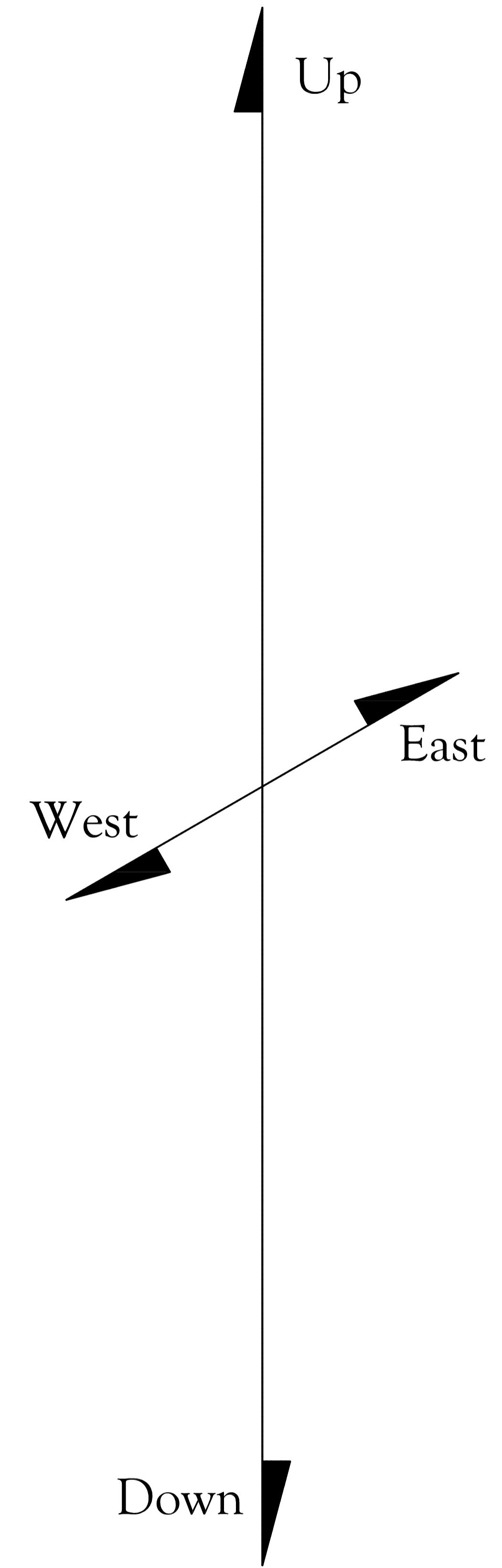
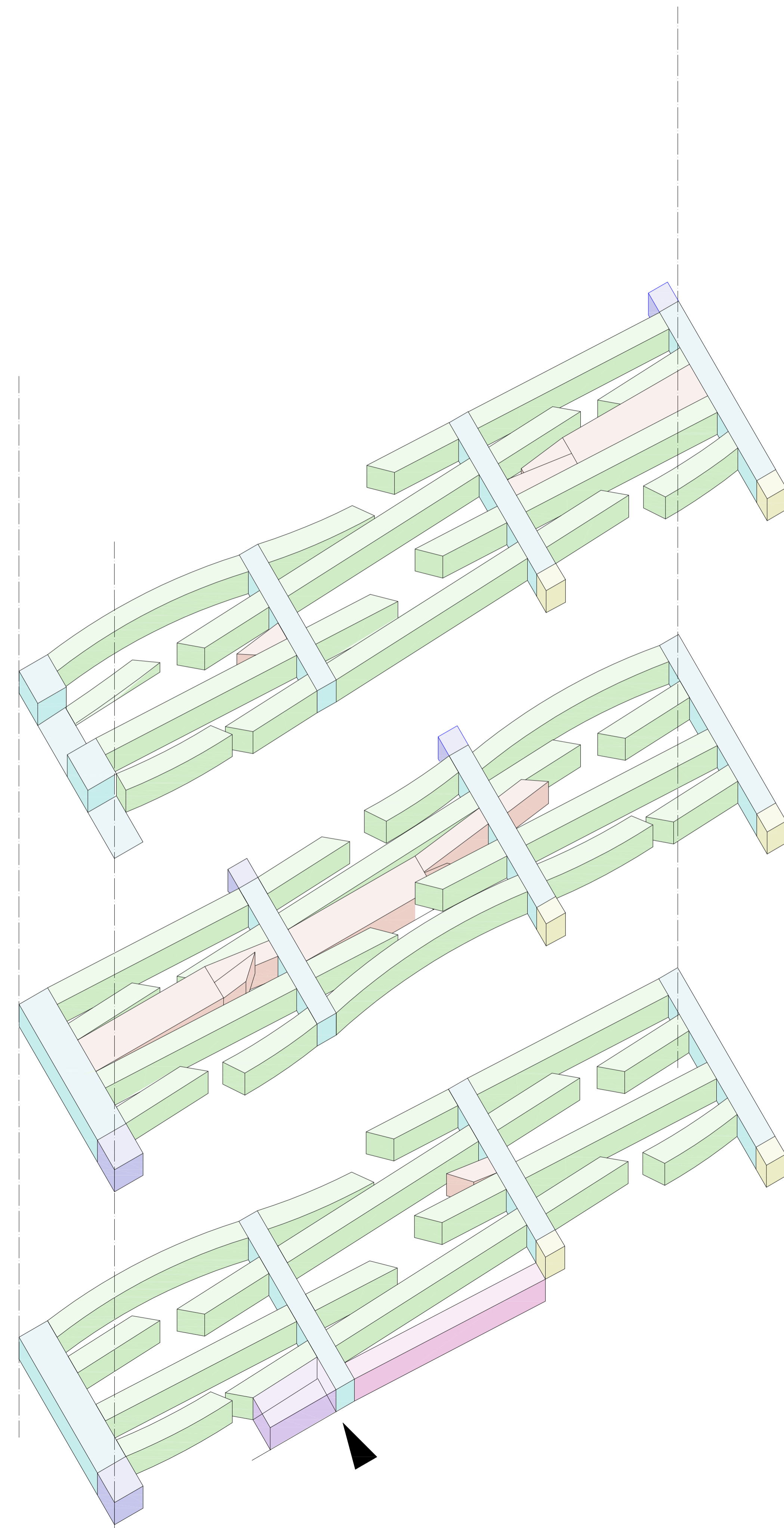
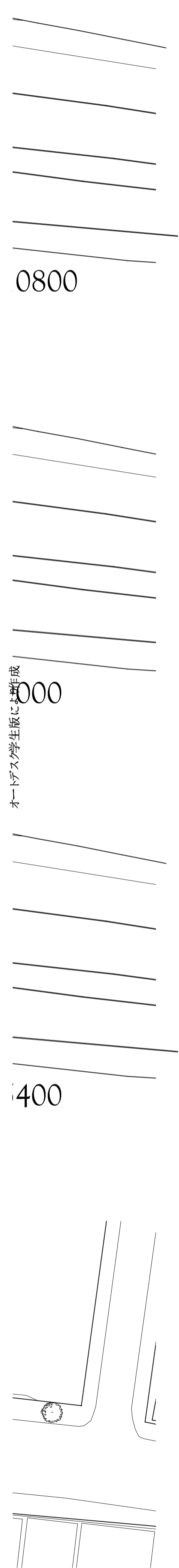


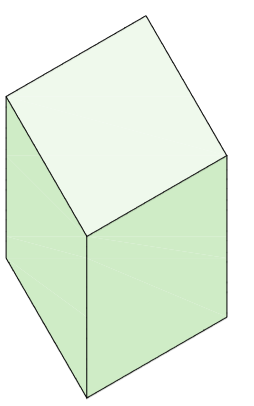
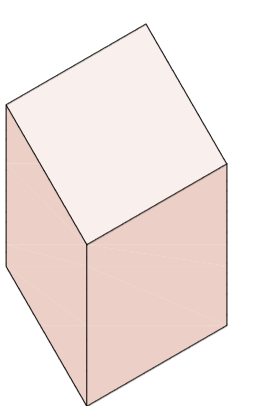
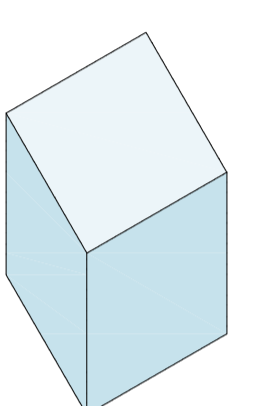
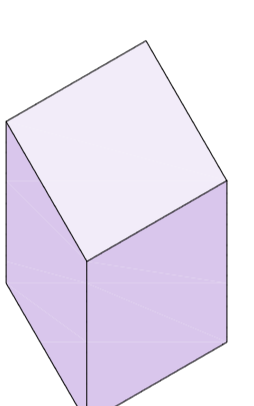
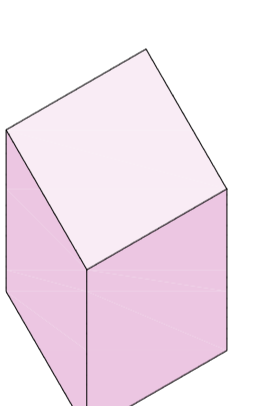
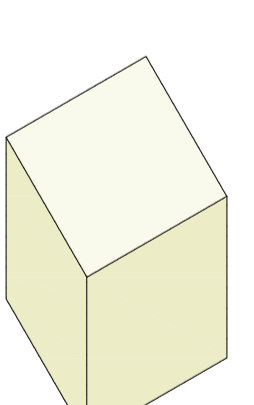
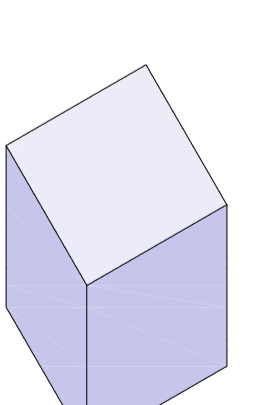
GL-3600=FL-18



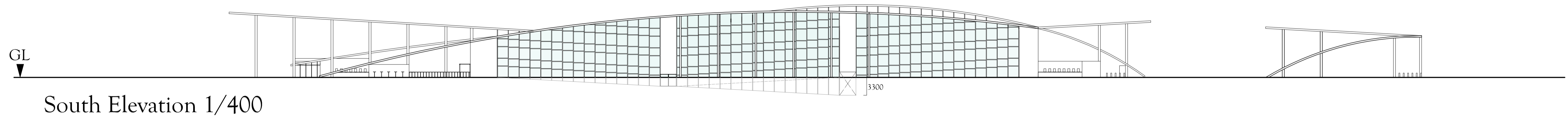
Home floor GL-9





-  Stack`s
-  Reading place
-  Corridor
-  Counter
-  Locker
-  EV
-  WC

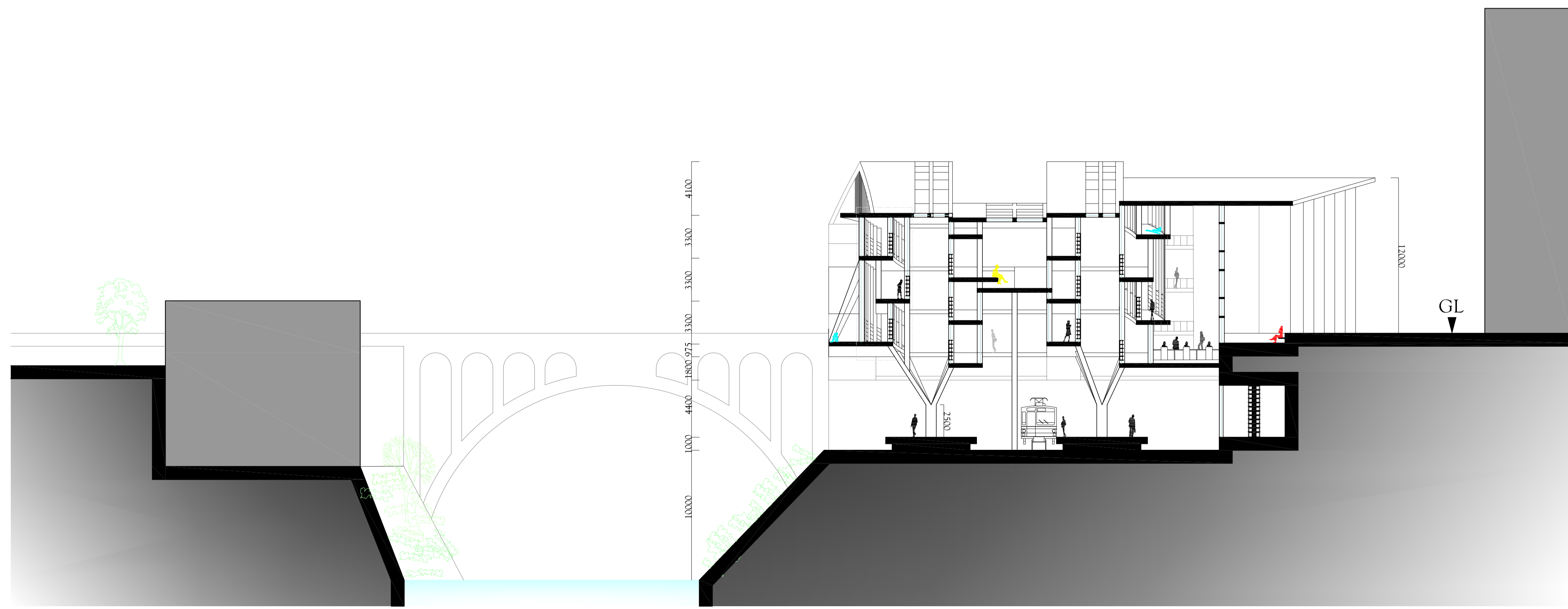
# The Stack`s Forest Map



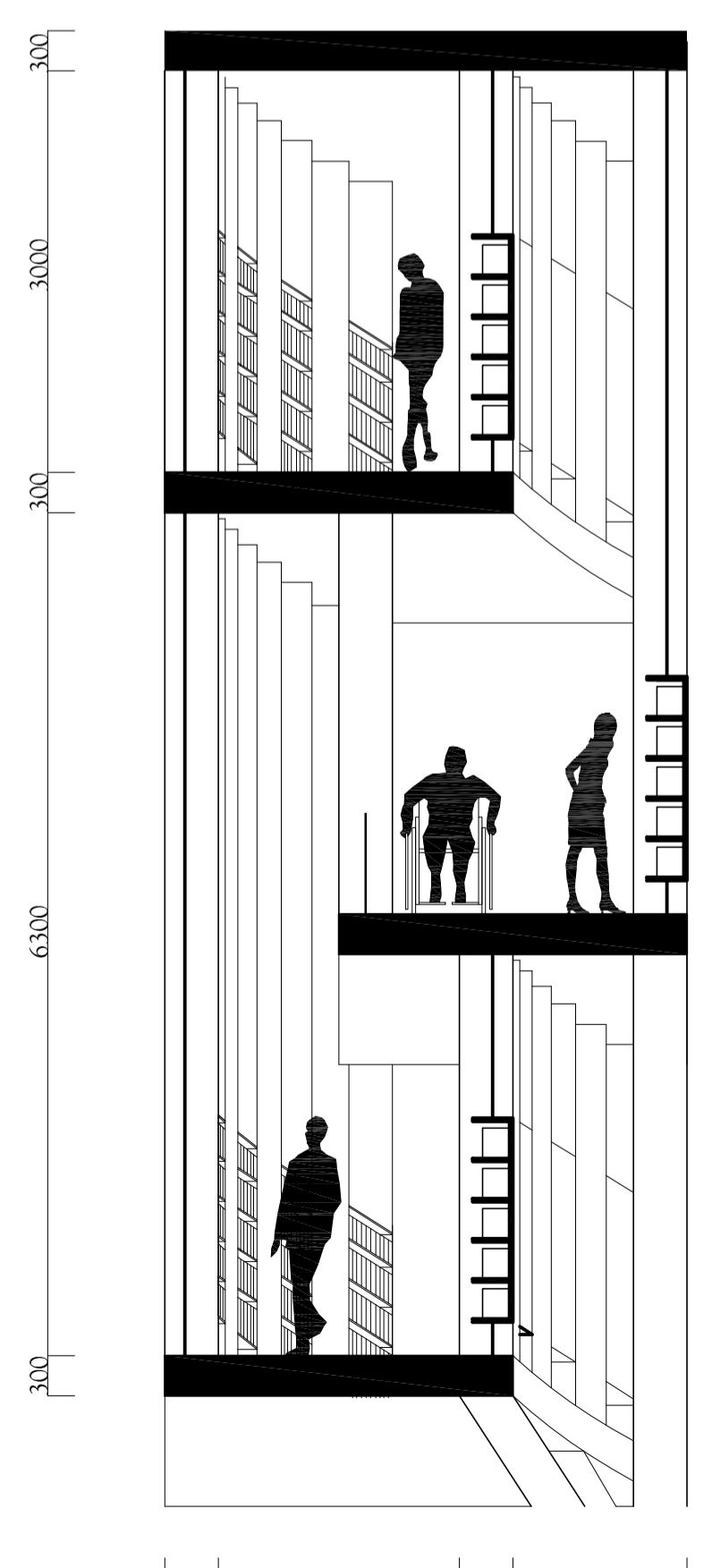
South Elevation 1/400



Section B 1/400



Section A 1/200



Stack's Section 1/50

L±0  
e 1/400

300

9000

オートデスク学生版により作成

オートデスク学生版により作成